

準備委員会企画特別講演 1

江戸の教育に学ぶ

大石 学

(東京学芸大学教授)

司会 出口利定 (東京学芸大学)

企画の趣旨

近年、様々な分野において江戸時代の見直しが精力的に行われており、教育の分野も例外ではない。江戸時代の教育——国策としての教育システムや当時の幼児・子女教育の思想、背景となる社会情勢・環境について、我々が抱いていた江戸期＝古く悪しき封建社会というイメージからはほど遠い豊かな実態が浮かび上がってきている。

この度の準備委員会企画として、江戸の教育についても研究をされている東京学芸大学・大石学教授(歴史学)に「江戸の教育に学ぶ」と題して講演をお願いした。講演では大石先生が手掛けておられるNHKの時代劇・大河ドラマ(「篤姫」,「新撰組」,「蟬しぐれ」等々)の時代考証にまつわる裏話など、愉快なお話も多く聴くことができた。

当日は大石先生が用意された資料が配布され、それを基に解説がなされたので歴史に疎い私にも講演内容はよく理解できた。以下に、配布資料から主に教育に関する部分を引用し、講演内容と併せて筆者なりにまとめてみた。講演に来られなかった会員の方々、さらにより詳細な講演内容について知りたい方は、大石(2007)をご参照いただきたい。

I. 時代劇の変化—「チャンバラ」から「現代劇」へ—

この10年ほどの間にテレビや映画などの時代劇でも、かつてのヒーロー、チャンバラ(様式美)、勧善懲悪という世界から、市井の庶民を主人公に、個人と家族、組織、社会の関係を描く現代に重なるような劇へと、設定やテーマが変わってきた。これは江戸時代が現代と隔絶した遠い未開の社会ではなく、現代と地続きの文明化された社会として捉えられるようになったことを意味している。

当時の一般社会の状況を大まかに知るために、また私たちが江戸時代に対して持っているイメージを少しでも事実に近いものにするために、当時の記録を基にご解説いただいた。その中でも特に筆者の印象に残ったものを以下に紹介する。

1. 斬合いのない時代

デンマーク人でフランス海軍士官として1886年来日したE. スエンソンは、「帯刀した者たちの間で流血事件が起きたと耳にするのはめったになく、この国の人間の性来の善良さと礼儀正しさを存分に物語っている」(スエンソン, 2006, p. 74)と記している。今日私たちが想像しているような斬合いは、日常的にはほとんどなかったとあってよい。

2. 使われない刀

プロシヤ生まれの外交官で、1861年から3度来日したルドルフ・リングウは、「日本という国は、あらゆる文明国の中でも、武器を持つ習慣が最も広まっている国であるので、その危険な習慣の不都合を出来るかぎり避けるために、厳しい規則を採用せざるを得なかった。正当防衛の場合でなければ、路上で何人も刀をぬけば、決まってこの上なく重い罪に問われるのである……槍の刃先、銃の銃口さえもが丁寧に鞘に包まれているのは、平和時に、なんなれと武器を人の目に曝すことを禁じている厳しい禁止命令のためなのである。敵国に遠征するときには鞘は外されないのである」(リングウ, 1986, p. 162)と記している。

3. 大名行列

大名行列についても、実際には私たちが持っているイメージとはかなり違っていただろう。1852年来日したドイツ人画家ベルクは、「行列はみな声を立てずに動いて行くが、身分の高い人の行列にあっては、前に行く先触れが『下にいろ』Sitaniro, つまり『膝まづけ』と叫ぶ。それと同時にすべての者が平伏するのである。しかし、われわれが大名行列に何度も出会ったことがあるけれども、これは一度も見なかった習慣であった。民衆は恐れて道を避けるが、この権力者をさほど気にしていないのが常であった。われわれの見たところでは、大部分の者は平然と仕事をしていた」(ベルク(著者), 1969, p. 162)と、行列の様子を記している。

4. 江戸時代の女性像

一抑圧された女性像から自立的・社会的な女性像へ一

(1) 離婚をする女性

① 夫からの追い出し離婚(専権離婚説)から熱談離婚説へ＝一方的な離婚申し渡しから再婚許可証へ(高木, 1987)

② 亀田藩岩城氏 2 万石(出羽国)——「嫁入り・婿入りの男女の区別なく約 3 割が『不縁』(家に合わない)として実家に帰される。……なかには 13 年間に夫, 養男子, その嫁など 9 名を次々に迎え入れ離縁した場合もある。……近世農村社会が男尊女卑の社会だったと速断することはできない」(今野, 2000)。

(2) 知行権を持つ武家女性

盛岡藩と仙台藩の家臣家では近世中期まで女性による相続が存続, 18 世紀半ばまで男系相続は貫徹せず(柳谷, 2001)。

(3) 駆け込みをする女性

「亀田琴岩城氏 2 万石, 出羽国由利郡平岡村の女性が藩の家老邸に, 隣村の男性のもとに嫁ぎたいと駆け込む。……別の縁談が持ち上がり, それを拒否するための駆け込みとみられる。村方は彼女の望みに任せたいとして, 身柄の引き受けを願い出る。好きな男性と添いたいと駆け込んだ女性と, それを認める村方の対応から見ると, 近世農村社会は女性の自己主張を受け入れる一面をもっていた」(今野, 2000)。

(4) 事件を起こす女性

「相模国高座郡上溝村において, 女性のかかわる事件は, 心中, 不倫, かけおち, 蒸発, 傷害, 非行・捨子, 金銭騒動, 夫婦喧嘩など。これらの例を見る限り, 封建制度下の女性が, 忍従を強いられたという思い込みは破られ, かなりしたたかに奔放に生きていたのを知る。これは, 農村女性が自らの労働により家を支えていた強みのゆえか」(長田, 2001)。

(5) 手習い(寺子屋) 師匠

明治 6 (1873) 年の東京府調査『開学明細書』によれば, 私塾・家塾 1,000 のうち女師匠 85 名(9%), 傭い教師 210 名のうち女性 7 名(3%), 筆道, 英字, 読み書き, 支那学, 漢学, 算学, 皇学などを教授。

(6) 外国人が見た女性

ローレンス・オリファント(1858 年来日, イギリス公使館の第一書記官に任命される)は, 「……おそらく東洋で女性にこれほど多くの自由と社会的享樂とが与えられている国はないだろう。一夫多妻制は許されていない。……女性の地位は東洋よりも, むしろ西洋で彼女たちが占めているところに近い。……この国では『家族』がきわめて重んぜられているので, 国の法に適ったすべての権利は彼女たちに属している。その結果, 婚姻の縁組は両親にとっ

ては慎重に考慮すべき事柄で, 立派な配偶者が大いに要望される。そこでこれらの女性は隔離されることなく, 劇場にも, 食事にも, 遊山にも, また草花の展示会にさえも出かけ, 思うままに振舞うのである。彼女たちは水上の遊樂が大好きで, またギター(三味線のこと)に堪能である……女性たちは踊りも達者だということである」(オリファント, 1968, pp. 105-106) と述べている。

II. 国民教育の発達と普及—外国人の驚き—

先に述べたように, 江戸時代については, これまで封建制・身分制の時代として, 現在の私たちの時代との断絶面が強調されてきたが, 近年では連続面が注目されている。講演では, 江戸時代の教育が地域や身分を越えて国民教育の基礎, 近代日本の知的基盤を形成したことが指摘され, 「江戸の教育力」の実態を江戸前期, 中期, 後記に分けて解説していただいた。

平和の到来と同時に一般庶民にも文字活用が広まった江戸前期, 8 代将軍吉宗の教育改革が行われた江戸中期を経て, 特に江戸後期は, 全国各地で武士のみならず民間の教育熱も高まり, 国民教育が飛躍的に普及した時期であった。この時期(後期)の特徴としては, 当時の資料を通して, 藩校・郷校(藩の庶民教育機関)・郷学が発達したことや, 手習所(寺子屋)の普及, それらの結果として識字率の向上(ほぼ 80% 台!)が挙げられる。さらに発達年齢に応じた教育方法や内容が細かく吟味されており, 今日学校教育にも通じる内容が多く見られた。

江戸後期の教育に関しては諸藩に多くの記録が存在し, 具体的にいくつかの藩における事例が紹介され, その多くは教育行政に関するものであった。筆者にとって非常に興味のある資料は, 以下に示すような外国人から見た感想・印象の記録である(いくつかの事例を抜粋)。これらはむしろ, 当時の教育行政・教育課程の成果や, 理論的根拠に基づいた教育方法・内容を知る客観的な観察記録ともいえる。共通していたのは, どの資料も当時の日本人の勤勉さ, 優秀さ, 学習意欲の高さを称えている点である。

1. 文化 8 (1811) 年ロシア海軍少佐ゴロウニン(井上訳, 1946)

(1) 「日本の国民教育については, ……日本人は天下を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書き出来ない人間や, 祖国の法律を知らない人間は一人もみない」(p. 31)。

(2) 「だから国民全体を採るならば, 日本人はヨーロッパの下層階級よりも物事に関しすぐれた理解をもっている」(p. 225)。

2. 文政3 (1820)年オランダ商館員ファン・オーフルメル・フイツセル (庄司・沼田訳注, 1978)

(1) 「日本人は、勉学に熱心であって疲れを知らない。彼らがオランダ人や中国人のもとで修業するために、日本国内の他の地方から長崎に留学することもまれなことではない。なかでも近年、これまで以上に数多く長崎に姿を見せ、またその才能と進歩のいちじるしい証拠を示したものは、多くの医師たちである」(1, p. 141)。

(2) 「たしかに日本には、われわれの大学に匹敵するような、比較的高等な科学の知識に到達するための施設はない。それにもかかわらず、科学が退歩しないように守り維持するために、彼らの学問業績を伝えて行くところの、將軍の豊富な収集品の管理者として江戸で任命される碩学たちの学会・協会の中には、ヨーロッパの大学とある程度匹敵するものがあるのである」(1, p. 146)。

(3) 「私には日本人ほど好んでペンや筆を振る国民があるとは信じられない。彼らはあらゆることを文書にして取扱う。また一般的にきわめて広い範囲にわたって手紙のやりとりを続けているので、婦人ばかりか男子も、このために時間の大半を費やしている有様である。彼らは手紙を書くのに、巻紙にして売られている貼り合わされた薄紙を使用している。そして一通の手紙が五エルまたはそれ以上の長さに及ぶ例を見ることもまれではない。彼らは封蠟も封かん紙も知らないが、封筒を一粒の飯粒かまたはわずかな糊でしっかりと閉じ、さらに筆をもってその上に文字を書き、あるいはまた自分たちの印章か封印を用いることもよくある」(1, p. 117)。

3. アレクサンダー・フォン・ジーボルト(ドイツ人博物学者フイリップ・フランツ・フォン・ジーボルトの安政5 (1858)年~文久2 (1862)年の再来日に同行した長男) (斎藤訳, 1981)

「……私は正規の漢字を習った。当時、日本の子供に文字を教えた方法を〔父〕そのまま私にもやらせようとした。私は最初にいわゆる部首を覚えねばならなかった。日本語の文字は約三万あるといわれているが、すべての文字はこの部首をもとにして構成されているからである。その教授法は極めて単純である。すなわち太い筆と墨を使い、繕った紙に何回も何回も同じ文字を上重ねて書くので、終いには黒いインクの大きなシミのようにならなくなる。さらにその上に書き続けると、ついには墨は次第に吸取り紙にしみ込んでゆくように紙にしみ込み、習字帳は黒い固まりになってしまう。これを後で日に乾かし、そして何度も書く、あるいはもっと正確に言えば、塗りつぶすのである。およそ百回も同じ字を書くと、ついには生徒ははっきりと覚えてしまい、清書してもよいことになる。先生は清書を朱墨でなおす。石盤を全然使わない。この単純な書き方の教授では、たくさんの

線や形からできている文字を覚えさせるために、強いて機械的な方法を生徒に課しているのである。……日本人がある文字の書き方を忘れてしまった時、彼がどんな風にするかを観察するのは、特筆に値する。日本人は長いこと考え込まず、人指し指を無雑作になんの上にも書くというわけでもなく動かしているが、普通は数回やっているうちに、複雑な字画の文字を思い出すのである……テキストは普通古典の書物であるが、クラス全体が同時に先生といっしょに大きな声を出して読む。もっと正確に言えば、合唱するのである……長い文章を講義する時には、最初はただ読み方だけを暗誦し、意味は問題にしない。後日上級に進んでから、やっと文字の意義や本文の意味を説明するのである……日本人の子弟がどんなに躰がよく行儀がよいかは、とうてい思いも及ばない。ヨーロッパで行なわれているような学校の罰則は全く聞いたことがない。……また子弟の教育のさいに、少なくとも教養のある階層では、体罰は行なわれぬ。私たちの国でよくやる鞭打ちを私は一度も見たことがなかった」(p. 79)。

4. 在日イギリス公使館封記官ローレンス・オリファン (安政5 (1858)年日英修好通商条約のために来日) (岡田訳, 1968)

(1) 「面白い例が、今後公式の信書に用うべき国語について行なわれた討議の中にあつた。一人の委員が、『左様、貴下がたは、英語を公用語とした方がよろしい。貴下がたが、日本語で公文書を書くことができるようになるまでにはどれほど長い期間かかるかわからない。ところが私たちに五年の歳月を与えるならば、私たちは貴下がたと英語で文通する能力を十分身につけるだろう』といったのである……(日本人は)熱意と好奇心とに満たされる。彼は調べてみて、手のとどくかぎりのことは何でも質問を発してその答を丹念に書き留める」(pp. 160-162)。

(2) 「……子供たちが男女を問わず、またすべての階層を通じて必ず初等学校に送られ、そこで読み書きを学び、また自国の歴史に関するいくらかの知識を教えられるといっている。もっとも賤しい農夫でも、教育を受けることが必要だという考えは、少なくとも、この程度まで行なわれているのである」(p. 162)。

(3) 「この記事からみると、日本には国民教育についてわが国よりもっと広く普及している制度があるようである。そして他の点についてそうでないとしても、とにかくこの点に関するかぎり、彼らがわれわれよりも進歩していることは明らかであると思われる。ときどき街を通っているとき、私は学課を学習している子供たちの楽しい喋々の声を聞いた……日本人は、確かに書物を読む

国民のようである。そして私が知り得たかぎりでは、女性は、その心情の発達している点で男性に劣るところがなかった。ゴローニンがこの事実を実証している。彼はこう述べている。『日本人はきわめて読書を好む。ふつうの兵士でさえ、勤務に当っていつも書物を携えて従事している。もっとも文学に対するこの情熱はわれわれにとっていささか迷惑だ。彼らはいつもまるで歌を唄うような調子で大声をあげて読むからである』。彼らはまた、まるで郵便制の楽しみにふけているかのよう、たがいに短い手紙を書くことが好きである」(pp. 162-165)。

(4) 「日本人はすべて小さな携帯用のインクスタンド[矢立のこと]をひもで胸に下げている。それはふつうきれいに漆で塗られ、中にペン、というよりも筆を一本収め、またインクを漏れないように入れた小さな部分がある。懐にはたくさん紙がある。一枚一枚になっていることもあるし、閉じてノート・ブックの形になっていることもある。われわれの金属の付いたノート・ブックは、いつも羨望と好奇的になっていたし、インド・ゴムのバンドの効用もしかるべく認められていた」(pp. 167-168)。

5. アメリカ東インド艦隊司令官ペリー(嘉永6(1853)年と翌安政元年に來日, 日米和親条約を締結)(土屋・玉城訳, 1955)

本が安く大量に売られていることに驚き、「教育は同帝国至る所に普及して居り」(p. 140)と、教育の普及ぶりを評価している。

6. アメリカ人ラナルド・マクドナルド(村上編, 富田訳訂, 1981)

「日本人のすべての人——最上層から最下層まであらゆる階級の男、女、子供——は、紙と筆と墨を携帯しているか、肌身離さずもっている。……下級階級の人びとさえも書く習慣があり、手紙による意思伝達は、わが国におけるよりも広くおこなわれている」(p. 124)。

7. 画家ベルク(万延元(1860)年~文久元(1861)年に日本に滞在したプロイセン人オイレンプルクの部下)の著作か(中井訳, 1969)

(1) 「……単に書くだけでなく、美しく書くことが要求されるので、子供のときから時間をかけて入念にやるのである。……詩をつくるにしても、単に詩の意味と形が重要であるばかりでなく、筆の運びの美しい流れが一枚加わるのである。それは、われわれの詩が耳のためにより響きと音節の抑揚を必要とするように、目に訴えることを要求する。……目と手の訓練は、日本における教育の本質的な部分である。またそれは、確かに日本人のもって生まれた活発さと感受性の源であり、同時に彼らの優秀な絵画的表現とその愛好の大きな原因となっているのである」(上, pp. 92-93)。

(2) 「……番所にいる兵士でさえ本を読んでいるし、子供や妻君や娘たちも熱心に読書に耽っているのが見られる。彼らの長編・短編小説の文献は非常に広範なものに違いないし、中には確かにヨーロッパの言葉に翻訳する価値のある魅力的なものも含まれているであろう。歴史の書物も、百科全書も豊富である。自然、学問、芸術、技術についての研究書ないし手引書が無数にあることは、この民族の活発な知識欲を証明するものである」(上, pp. 96-97)。

(3) 「読み書き、国史、道徳哲学などについての青少年教育は、非常に熱心に行なわれている。いろいろな段階の教育施設もある。多種多様な日本の文字を習得することははなはだむずかしく、かつ苦勞の多いものではあるが、書道は低い身分の間でも一般的によく広まっている。暇などときの読書はあらゆる階級の日本人が第一にすることである。本屋には、日本・シナの書のみならず、地理・民俗・天文、その他自然科学の各部門、医学・戦術・兵書等々のヨーロッパの本の翻訳が見られる」(上, p. 296)。

おわりに

(1) 江戸の教育は、地域や身分を越えて国家的規模で発達していた。江戸時代は、武士のみならず庶民が教育の対象となり、さらに庶民自身が主体的に学ぶ姿勢を獲得した点において、国民教育の形成期であった。明治維新において、新政府が地域差・身分差を否定する廃藩置県や身分制廃止などの諸政策を打ち出した際、大きな混乱や抵抗なしにこれらが実現した前提の一つに、「江戸の教育力」があったといえる。明治政府の統一的な教育制度は、決して「江戸の教育力」を否定して始められたものではなく、むしろこの延長上に達成された。「江戸の教育力」は、まさに近代日本の知的基盤を形成したのである。

(2) 義務教育でない江戸時代の就学率・識字率の高さは、庶民の教育・学習への高い関心や強い意志に基づくものであった。現代においても、社会が、保護者が、さらには児童・生徒自身が教育の意義を認識し、学習の楽しさを理解できるよう環境を整備する必要がある。今日の教育改革の本質はここに求められるべきと考える。また、本書が枠組みとした「平和」「文明化」と「教育力」の相互関係も、現代的視点から捉え直されなければならない。今日「世界化」の中で、各国・各地域が、様々な格差を縮小しつつ、それぞれの個性を発揮すること、すなわち同質性(普遍性)と異質性(個別性)の共存は、人類史的な課題となっている。こうした理念を実現するのは、武力ではなく、「平和」「文明化」を推し進める意志と知恵であろう。暴力や格差を伴わない、「真の世界化」を実

現するためには、世界規模で武器を管理するシステムや、人命・自然を尊重する意識が形成・共有されなければならない。こうしたシステムの開発や、意識の形成を基礎から支えるのは、世界規模での「教育力」なのである。「江戸の教育力」の多様な実態と発展の考察は、日本の将来のみならず、世界の将来を構想する起点としての意義を持つことを指摘したい。

引用文献

- ベルクの著作か 中井晶夫 (訳) (1969). オイレンブルク日本遠征記・上 新異国叢書第12 雄松堂書店
- フィツセル, V. O. 庄司三男・沼田次郎 (訳注) (1978). 日本風俗備考 1・2 平凡社東洋文庫
- ゴロウニン, V. M. 井上 満 (訳) (1946). 日本幽囚記 岩波文庫
- 今野 真 (2000). 村方・家文書に見る生活史料—東北留書帳と人別帳から見た農村女性観— 木村 礎 (編) 地方史研究の新方法 八木書店
- マクドナルド, R. 村上直次郎 (編) 富田虎男 (訳訂) (1981). 「日本回想記」—インディアンの見た幕末の日本— 刀水書房
- 大石 学 (2007). 江戸の教育力—近世日本の知的基盤— 東京学芸大学出版会
- オリファント, L. 岡田章雄 (訳) (1968). エルギン卿遣日使節録 新異国叢書 9 雄松堂書店
- 長田かな子 (2001). 村方・家文書に見る生活史料—関東— 木村 礎 (編) 地方史研究の新方法 八木書店
- ペリー, M. C. 土屋秀雄・玉城 肇 (訳) (1955). ペリリ提督日本遠征記 岩波文庫
- リングウ, R. 森本英夫 (訳) (1986). スイス領事の見た幕末日本 新人物往来社
- ジーボルト, A. 斎藤 信 (訳) (1981). ジーボルト最後の日本旅行 平凡社東洋文庫
- スエンソン, E. 長島要一 (訳) (2006). 江戸幕末滞在記—若き海軍士官の見た日本— 講談社学術文庫
- 高木 侃 (1987). 三くだり半 平凡社選書
- 柳谷慶子 (2001). 女性による武家の相続 長野ひろ子他 (編) ジェンダーで読み解く江戸時代 三省堂